補文標識の音韻的分析

田村　惇

1. 導入

節が動詞の補部位置（基準的位置）にある場合，顕在的な補文標識は随意的である．一方で，節が動詞の補部以外の位置（非基準的位置）にある場合，顕在的な補文標識が義務的である．

(1)　a.　I believe [$_{CP}$ that/Ø John liked linguistics].　(An (2007: 39))

　　b.　*I distrust [$_{NP}$ the claim [$_{CP}$ that/*Ø Bill had left the party]].　(Stowell (1981: 398))

本論は，英語の補文標識 *that* と Ø の交替現象について，音韻的な観点から分析を試みる．

2. 先行研究とその問題点

An (2007)は，非基準的位置にある節は Intonational Phrase(IntP, ι)を形成することを指摘し，IntP の端は Ø であってはならないという一般化を提案している．それゆえ，(2a)の基準的位置に現れる Ø は IntP の端を占めないため文法的であるのに対し，(2b)のような配置型はこの一般化によって排除される．

(2)　a.　(I believe Ø John liked linguistics)ι

　　b.　*I distrust the claim (Ø Bill had left the party)ι

しかし，根節は IntP を形成し，かつ非顕在的な補文標識が義務的である．

(3)　a.　[$_{CP}$ Ø John likes linguistics].　(An (2007: 62))

　　b.　(Ø John likes linguistics)ι

(4)　a.　*[$_{CP}$ That he can't stand garlic].　(Radford (2018: 105))

　　b.　(That he can't stand garlic)ι

この事実を踏まえると，*that* と Ø は Utterance(U, υ)と IntP を含む音韻構造上で以下のような分布を示す.

(5)　a.　[　　]υ

　　[^{ok}Ø　　]ι [*Ø　　]ι

　　b.　[　　]υ

　　[*that　　]ι [^{ok}that　　]ι

　　c.　[　　]υ

　　[　　^{ok}Ø/^{ok}that　　]ι [　　]ι

An の一般化は，(5a)の U の端にない IntP の端に生起する Ø に焦点を当てたものである．しかし，根節に現れる Ø, すなわち音韻構造上では U の端にある Ø がこの一般化の問題となる．これに対し, (5b,c)が示すように, *that* が唯一禁じられるのは U の端の位置である．それゆえ本論は，*that* が U の端で利用できないことに焦点を当て分析を行う．

3. 本論の主張と分析

本論は，Harizanov (2014)の音韻的制約 Strong Start を仮定する．

(6)　Strong Start

　　IntP の最大投射の左端の要素は音韻的に弱い要素であってはならない(そのような要素は韻律語内になければならない).

この仮定に基づき，以下のような提案を行う．

(7)　Strong Start が全ての IntP に適用され，制約を満たす IntP は U を形成する(制約を満たさない場合は IntP のままとして残る).

上記の提案は具体的に，以下のような手順で行われる．

①IntP の形成

(　　)ι

②Strong Start の適用

(**α**　　)ι　→　Strong Start の適用

③左端の要素が(i)弱い要素(σ)であれば IntP として残り，(ii)そうでない場合は U を形成する．

(i)　(**σ**　　)ι　→　Strong Start の適用　→　(**σ**　　)ι

(ii)　(**ω**　　)ι　→　Strong Start の適用　→　(**ω**　　)υ

この提案に基づくと，Ø をもつ根節は(8)の音韻構造を持つ．

(8) a. [$_{CP}$ Ø John likes linguistics].
b. (John likes linguistics)ι → Strong Start
c. (John likes linguistics)υ

(8b)において非顕在的な Ø は音韻構造に存在せず，IntP の左端には *John* が生起する．*John* のような語彙範疇は音韻的に弱い要素ではないため(Selkirk (1996))，Strong Start の違反は生じず，(8c)で適切に U が形成される．一方，*that* を伴う根節は(9)の音韻構造を持つ．

(9) a. *[$_{CP}$ That he can't stand garlic].
b. (That he can't stand garlic)ι → Strong Start
c. (That he can't stand garlic)ι

(9b)では IntP の左端に *that* が存在する．*that* のような機能範疇は音韻的に弱い要素であり(Selkirk (1996))，この構造は Strong Start に違反する．その結果，文全体が U に含まれない不完全な音韻構造となるため非文となる．

次に Ø が許されない名詞句の補部節は(10)の音韻構造を持つ．

(10) a. *I distrust [$_{NP}$ the claim [$_{CP}$ Ø Bill had left the party]].
b. (Bill had left the party)ι → Strong Start
c. (Bill had left the party)υ
d. (I distrust the claim)ι (Bill had left the party)υ → Strong Start
e. (I distrust the claim)υ (Bill had left the party)υ

(10b)の名詞句の補部節においては左端に語彙範疇 *Bill* が存在するため，Strong Start に違反しない．それゆえ当該の IntP は U を形成する．また，補部節以外の要素も同様に独立して U を形成する．これは一つの U が文全体を含んでいない不適切な音韻構造であるため非文となる．一方，*that* を伴う補部節は(11)の音韻構造を持つ．

(11) a. I distrust [$_{NP}$ the claim [$_{CP}$ that Bill had left the party]].
b. (that Bill had left the party)ι → Strong Start
c. (that Bill had left the party)ι
d. (I distrust the claim (that Bill had left the party)ι)ι → Strong Start
e. (I distrust the claim (that Bill had left the party)ι)υ

(11b)の補部節においては左端に音韻的に弱い要素である *that* が存在するため Strong Start 違反が生じる．したがって，この IntP は U を形成しない．続いて(11d)において主節の IntP が形成されるが，Ito and Mester (2012) に基づき，根節の IntP が補部節の IntP を含む構造を持つと仮定する．主節の IntP は左端の要素 *I* が Strong Start を満たすため適切な音韻構造(11e)が得られる．

最後に *that*/Ø が基準的位置にある例を説明する．

(12) a. I believe [$_{CP}$ that/Ø John liked linguistics].
b. (I believe that/Ø John liked linguistics)ι → Strong Start
c. (I believe that/Ø John liked linguistics)υ

(12b)の IntP では *that*/Ø は左端の要素でなく，Strong Start の制約を受けないためどちらも容認される．

4. 結論

本論は音韻的制約 Strong Start が全ての IntP に適用されると仮定することで，顕在的・非顕在的補文標識の分布に統一的な説明を与えた．

参考文献

An, Duk-Ho (2007) "Clauses in Noncanonical Positions at the Syntax-Phonology Interface," Syntax 10, 38-79. / **Harizanov, Boris** (2014) "The Role of Prosody in the Linearization of Clitics: Evidence from Bulgarian and Macedonian," *FASL* 22, 109-130. / **Ito, Junko and Armin Mester** (2012) "Recursive Prosodic Phrasing in Japanese," *Prosody Matters: Essays in Honor of Elizabeth Selkirk*, ed. by Toni Borowsky, Shigeto Kawahara, Tokahito Shinya and Mariko Sugahara, 280-303, Equinox, London. / **Radford, Andrew** (2018) *Colloquial English: Structure and Variation*, Cambridge University Press, Cambridge. / **Selkirk, Elizabeth** (1996) "The Prosodic Structure of Function Words," *Signal to Syntax: Bootstrapping from Speech to Grammar in Early Acquisition*, ed. by Jerry L. Morgan and Katherine Demuth, 187-213, Lawrence Erlbaum, Mahwah. / **Stowell, Tim** (1981) *Origins of Phrase Structure*, Doctoral dissertation, MIT.